

小田実

才毛二太平記



小田 実

才毛二太平記

蘇工業学院図書館
藏 書 章

オモニ太平記

平成二年十月五日 第一刷発行
平成二年十一月十日 第二刷発行

著者 小田 実

発行者 木下 秀男

印刷所 大日本印刷

製本所 青柳製本

発行所 朝日新聞社

〒104-11 東京都中央区築地五ノ三ノ二
☎〇三―五四五―〇一三一（代表）
編集・図書編集室／販売・出版販売部
振替・東京〇―一七三〇

© Makoto Oda 1990 Printed in Japan

ISBN4-02-256196-3

定価はカバーに表示してあります

才毛二太平記・目次

カラフトのオモニたち	7
ヤクジャと思想家 ^{ササガ}	17
「オモニ語」と「アボジ語」	30
キミガヨ丸とクンデワシ	41
ウニ首相の妓生遊び ^{キセイシノリ}	54
おたがい、がんばったな	62
「ゲーリー・クーパー」の「朝鮮」	71
「日本海」と「東海」 ^{トシヘ}	82
ご飯はマラソ食べるんや	91
もうそんなにうらめへんねん	99
宝島シマネケン	109
「明治の人」	119
二つの年号	129
学士会館の「生きた化石」とオモニ	139

オモニの「洋来」——オダさん、ほんまにウソつきや
148

「フランスは雪やった」、あるいは「お金より儲けや」
157

「サムシンのおばあさん」と「ソウル」
166

オモニの「ベルリン日記」
175

「わたしも来るがな」
184

おたがいの「くに」の話
191

オモニが帰りたい日本
200

死出の旅装束
209

神様、シンドイケドガンバツテクダサイ
217

オモニは二軒の家持ち
225

「族譜」騒ぎ
235

「解放」おばあさんの来訪
246

「南北統一」忘年会
256

ならの「ぱんや」
267

装画・玄
装幀・多田
進 順恵

才
毛
二
太
平
記

カラフトのオモニたち

カラフト、いや、サハリンに行ったら、オモニが何人、何十人、何百人いるのにおどろいた。サハリンの首都ユージノサハリンスク、昔は豊原と言ったそうだが、そのバザール、つまり、市場に行くと、いるわいるわ、オモニがズラリと並んで、キムチを売り、トマトを売り、花を売っている。みんな年をとったオモニで、そろって洋服を着ていたが、今ははやらぬ日本語を使っている。日本のおばあさんがアッパツバを身にまとい、ズラリと並んでいるように見えた。なかにはそれこそ日本のおばあさん、おばさんが昔よくやったように手拭いでアネさんかぶりに髪の毛を覆っていたりするのがある。

わたしはかなり年をとった人間だから（当年として五十有余歳。「人生五十年」とすればもうとつきの昔に死んでもいい年だ。いや、一世の文豪夏目漱石などは、たしかにわたしの年齢ではもう死んでいた）、そういうアッパツバ、アネさんかぶりのオモニたちを見ていて、まず思い出したのは、わたしの母親のことである。彼女ももうとつきの昔に死んでいるが、生まれたのは明治三十数年の

こととあって、まちがいなく「明治の女」。たしかに彼女のアップパツバ、アネさんかぶりの姿もしばらく私の眼に浮かんで来ていた。彼女の晩年、いつのころからか、わたしは母親のことを「おばあちゃん」と言いならわすようになっていたのだが、「おばあちゃん、元氣か」とそのころよくやっていたような挨拶をわたしはいつのまにか臉おもてのなかの母親と眼前の花売りおばあさん、いや、キムチ売りおばあさんの姿に二重うつしさせるようにしてやっていた。

しかし、わたしの亡き母親の連想は長くつづかなかった。そこはおばあさんたちはさすがに朝鮮人、何やら彼女たちのことばでわめきたてるのを耳にすると同時に連想はただちにもうひとりのべつの「明治の女」、アップパツバ、アネさんかぶりの女性のほうにむかっていた。

「この日本人インゴシサムの奥さん、朝鮮人だね。」

バザールまで連れて来てくれた金さん、キムチ売りのおばあさんがさし出したキムチの一片をすばやく口のなかにほうり入れながら言った。わたしもわたしで口にほうり入れる。うまい——と言いたい、トーガラシが不足しているのか、ただめつぽう塩からい。まあ、しかし、ありがとう、カムサハムニダ。

キムチおばあさんにしろ、列のまえを素通りして来た花売りおばあさんにしろ、みんな日焼けしている。一日じゅう、露店の市場に立っているのだから無理もないが、そのなかでもっとも日焼けしたおばあさんのまえにわたしと金さんは立っていた。

おばあさんは金さんのことばにまずおどろいたようだった。「まさか」というような顔をアネさんかぶりの下でする。ほんとだよ——というぐあいにはうなずく。とたんにおばあさん

は、さつきから愛想よかったのだが、とびきり親愛の情を示すように大口をあけて笑い出していた。日焼けした顔に歯ならびの白がきれいにのぞく。丈夫な歯を持ったおばあさんだ。おかた自分のつくったキムチを精出して食っているからだろう。

「子どもがいるよ。」

わたしは言った。

「いくつ。」

「四歳半。」

「じゃあ、ヨメさん、若いな。」

（孫のまちがいじゃないか）という目でおばあさんはわたしをジロジロ見た。

「若くもないが。……」

わたしは話題を変えた。

「ヨメさんのオモニはあんたより年とっているよ。」

「いくつ。」

「もう八十歳や。濟州島の生まれで、まず大阪に来て、それから神戸。……」

日焼けおばあさんはいつそう相好を崩した。

「うちも大阪にいたんや。大阪からな、終戦のちよつとまえにな、ここに来えへんかいいう話があつて、……弟がいはったんや、それで来て、そのままや。大阪は今どないになつとる。」

「どないになつとる」と言われても答えられるわけではない、ことばの問題ではない。いつのまに

か最初下手に朝鮮語でしゃべっていたのが日本語になっていた。ありがたいことに、わたしの下手クソな朝鮮語にうんざりしたのか、日焼けおばあさんのほうが日本語を思い出し思い出ししゃべり出していたのだ。こっちも渡りに舟と日本語になる。それも私が生まれ育ち、日焼けおばあさんがかつて住んでいたという大阪のことばだ。二人とも自然にそのことばでしゃべっていた。おばあさんもつかえつかえしながらしゃべったが、つかえないときはうまいものだ。そして、もちろん、朝鮮語がなかに入る。どうかすると、それが半分ほどになる。つまり、日本語と朝鮮語双方のチャンポンでしゃべっている。急にわたしのつれあいの、いや、つれあいのことをわたしは「人生の同行者」という舌を噛みそうな言い方で言うことにしているのだが、老オモニのことがなつかしくなつて来たのは、眼前の日焼けしたおばあさんの顔がなんとなくわが老オモニの顔に似ているのにつけ加えて（厳密に言うとは、顔かたちはまったく似ていないのだ。それでいてふしぎに二人のおばあさんの顔は似ていた）、その日本語、朝鮮語のチャンポン語がまったく老オモニのものでもあったからだ。

「子どもは何人？」

わたしは訊ねていた。

「五人。もう、みんな大きいで。」

いちばん上が運転手で、次が学校の先生で、その次が百姓で……というぐあいに彼女は言ったが、わたしはよくおぼえていない。

「孫は？……」

途中でさえぎるようにして訊ねたが、答えは、

「十人。」

これはわが老オモニの場合と合致している。そのむね言うところ、キムチおばあさんはまたニコニコした。わが老オモニの子どもは、末娘のわたしの「人生の同行者」を入れて七人、すべて女ばかりだ。

「あなたのナムピョンは……」

とわたしもチャンボン語を口にした。ナムピョンはつれあい、「人生の同行者」のことである。「孫の世話をしているよ。」

それから、もうだいぶモーロクしてしまったとか、何も仕事しないとかブツブツ、愚痴まじりの話がつづいたが、判ったのは、百姓の三男だかがキムチの原料となる白菜やらキヌウリやら、あるいはトマトやらをつくり、それを彼女がキムチに仕立てあげて、いや、トマトはもちろん生のままでだが市場に持って来て売っているとのことであった。ついでに言っておくと、トマトは昔、カラフト時代にはサハリンではできなかった。いや、白菜もそうだったのではないか。

「この人ら、こう見えてもお金持ちだ。」

金さんが横から口を出した。出番をさつきから待っていたような言い方だったので、少しおかしかった。皮肉げでもあれば、心もちうらやましがっている感じも声のひびきにはある。彼が説明してくれた。

まず、「この人ら」には、ソビエト政府は社会主義国だから、年金がたっぷりあって不安なく

くらせるようになってる。もちろんその額を「おたくの国日本」のお金の額に換算すると「スズメの涙」になるが、そういう換算はだいたいが無意味である。このくらしの水準から言うとなかなかの金額で、彼女のと彼女の「人生の同行者」の分とを足すと、たっぷりしたものになる。その上で、こうやってキムチ売りをしてひと儲けしている。このキムチ、こう見えてもなかなか値のはるしろもので、サハリンに山といふ（三万五千人だが、いるそう）朝鮮人^{カレンスキー}はよく文句を言っているそう。バザールの露店市場で、アッパッパにアネさんかぶりというたいして見ばえのしないかっこうでキムチを売っているとなく憐れげだが、そう見えるものだが、内実はどうしてどうして、ただの新聞記者の金さんなどよりはるかに金持ちだ。さっきの彼のことばにあった「こう見えても」の意味はそうしたものだ、そうわたしに合点できたが、金さんは新聞記者だけに消息通で、このおばあさんたちは、子どもはみんなソビエト国籍をとってレッキとしたソビエト人になっているのに、頑としてソビエト国籍をとらないでいる。つまり、今は「無国籍」ということになっているのだが、それはひとえに生まれ故郷の朝鮮——その南半分の韓国にいつか帰りたいからだ。三万五千人の朝鮮人^{カレンスキー}（と金さんはロシア語で自分たちのことを言った。韓国やら「北朝鮮」やらでことがややこしいので、そうロシア語を使ったのかも知れない）の大半は、南半分の出身であることは、これは金さんに聞かずとも、わたしは知っていた。

「帰ったっていいけど、しかしですな。……」

と金さんはしかつめらしく言った。

「帰ったとたんに、黙って年金をくれていたソビエトのほろがよろしいと言ひ出すかも知れませ

んよ。韓国政府が年金を出すはずはないから。……」

とどのつまり、「反共法」にでもひっかかって、おばあさんたちローヤに入ることになるかも知れない。あるいは――。

「また、この人ら、こっちのほうがよくかたと帰って来るかも知れませんか。ええことやってくれるところがわたしらえらいさんでない人間にはいしばんええんですからな。こっちがあかんなったら、また出ていく。そういうのがほんとはいちばんええかも知れませんか。」

金さんはなかなか達観したことを言った。こういう達観したことを言えるようになったのが「ペレストロイカ」の「ペレストロイカ」たるゆえんなのかも知れない。現実には、もちろん、なかなかことはそうなっていないのだが、いつかはそういう事態になる――と信じているようなひびきがことばのうらにあつた。

金さんは、地元の朝鮮語の新聞社の記者だ。わたしが新聞社を訪ねると、出て来たのが彼だった。あれこれこの地の朝鮮人たちの話を聞いているうちに、それじゃあ、案内してあげましょうということになった。

「どこへ行きますか。」

と彼は日本語で訊ねて来た。考えてみると、彼ははじめは朝鮮語でしゃべっていたのだ。その朝鮮語を編集長が日本語になおすというやつかいことをやっていた。どちらもご年配なので、昔ならいおぼえた、いや、ならいおぼえさせられた日本語ができるのである。それにしても、はじめ彼は日本語をしゃべらず、編集長に通訳をやらせていた。

「バザール」へでも行ってみたい、と思っている——とわたしは言い、「そんなら、ボクが案内してあげよう」ということになった。金さんの日本語は上手で何のよどももなくしゃべったが、ただ、「ボク」はちよつと氣になったが、それもお愛敬である。

みちみち、いろんな話をした。わたしの「人生の同行者」が朝鮮人であることもしゃべった。

「南北分裂」が彼女の家族にも及んでいて、両親は「南」の韓国に所属し、彼女をふくめて彼女の七人の娘（よく女ばかりできたものだ）は「南」「北」それぞれに分かれている——というような話もしゃべりついでに出ていた。「フム、フム」と金さんはうなずいた。「バザール」へ入りがけに、「ここのおばあさんら、日本人がなつかしいのでしような。日本人が来ると、キムチなんかタダでいくらでもくれますよ」と事実をそのまま述べているのだというふうな口調でそくさと言った。

実際、五人の子どもと十人の孫、グウタラで何もしないナムビョンを持つ日焼けおばあさんはわたしにキムチをくれかかっていた。ビニール袋にたんまり入れて持って行け、という。金さんのほうにも、わたしの分の半分がとこを入れた袋をつくって、「ハイ、どうぞ」。これは日本語で言った。

ことわつてもラチがあきそうにないのでありがたく頂戴することにしたが（ホテルへ帰って、ポソポソ食っている自分の姿が眼に浮かんで来ていた。そして、それは実際にそうだった）、お礼に持参していたカメラでおばあさんの写真を撮ることにした。

とたんに慌てて身じまいを正し出す。まわりの店のおばあさんたち、ガヤガヤ、冷やかし半分